

はじめに

親愛なる神は、細部に宿る。Der liebe Gott steckt im Detail.
アビ・ヴァールブルク Aby Warburg (1866-1929)

西洋の古典文化は壮大な伽藍に見立てられる。ドイツ語で *Altertumswissenschaft*、英語で *classics* と呼ばれる古典学は、西洋文明の基礎、そして故郷として重んじられてきた。その学問は古代以来の発展と蓄積を経て、人文学の知の基盤をなしている。二千数百年にわたる人類の知的遺産は、まさに1つ1つの緻密な読解や議論の積み重ねに他ならない。

ヴァールブルクの言葉として知られる「神は細部に宿る」は、おそらく古い格言に遡るものだが、文化そのもの、そしてその精髓としての古典学にこそ当てはまる。限りなく細密で、気の遠くなるような地道な職人芸が生み出した作品には、1つの世界が込められている。

神がいるとは、そこに全体があり、生命が宿ることを意味する。一語一語を吟味し、伝承の一筋一筋を辿り、一場一場を明確にしていく議論は、まさに細部にこだわり尽くし、そこに全体としての神を見ようとする挑戦である。私は、古典学の営みとはそのようなものだと考えている。

ひとたび伽藍が建立されると、その内部には古の言葉が響き渡る。床に敷かれたモザイク画を無数の小石で組み上げてきた人々が、あるいは、壁の彫像を刻んできた人々が、今度はその建物の参列者となる。そこで彼らは、古典の世界が奏でる天上の音楽を聴くことになる。

古代から伝承された文献を読み解きながら、深く思索を沈殿させる。その行きは緩慢かもしれないが、咀嚼や反芻が精神の悠久の歩みを標す。本書はそうした営為の一端をなす。ここに、哲学の言葉の響きを聴いていただけたら幸いである。

目 次

	はじめに	i
	凡 例	viii
第 1 章	西洋古典哲学の理念と方法	003
	第 1 節 西洋古典哲学／第 2 節 古典文献学／第 3 節 古代哲学史 ／第 4 節 研究の射程	
	第 1 部 初期ギリシア哲学・ソフィスト思潮	
第 2 章	視点を超えて語る	015
	——クセノファネス断片 34 DK	
	第 1 節 クセノファネスの認識論断片／第 2 節 断片 34 の多様な 解釈／第 3 節 クセノファネスの位置づけ／第 4 節 叙事詩の語り ／第 5 節 語り手の立場／第 6 節 クセノファネスの意義	
第 3 章	ソフィストの言行を証言する	035
	——ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第 9 卷 「プロタゴラス伝」	
	第 1 節 資料研究への方法論／第 2 節 デイオゲネス・ラエルティ オスとプロタゴラス資料／第 3 節 「プロタゴラス伝」テキスト／ 第 4 節 「プロタゴラス伝」翻訳／第 5 節 「プロタゴラス伝」注記 ／第 6 節 資料分析の課題	
第 4 章	神の存在について発言する	063
	——プロタゴラス断片 4 DK	
	第 1 節 プロタゴラス『神々について』をめぐる資料状況／ 第 2 節 現代の復元案／第 3 節 著作の表題／第 4 節 証言の検証	

／第5節 証言の多様性と原文の復元案／第6節 哲学史における
 伝承

第5章 喜劇がソフィストを揶揄する ————— 097

—— アリストファネス『鳥』689-691

第1節 ソフィストと喜劇／第2節 プロディオコスへの言及／

第3節 揶揄の意図

第2部 プラトン（一）初期から中期へ

第6章 最初の言葉が挑発する ————— 113

—— プラトン『ソクラテスの弁明』17A

第1節 冒頭の発言／第2節 テキストと解釈／第3節 ソクラテ
 スのメッセージ

第7章 哲学的政治の理想が挫折する ————— 121

—— プラトン『カルミデス』の背景

第1節 クリティアスをめぐる問題／第2節 クリティアス「悪
 人」像の成立／第3節 クリティアスらの政治行動／第4節 4つ
 の哲学的問題局面／第5節 『カルミデス』でのクリティアス吟味
 ／第6節 『ポリテイア』でのクリティアスとの対決／第7節 ク
 リティアスとは何者か

第8章 古人の語りを引用する ————— 141

—— プラトン『饗宴』178B-C

第1節 テキストの異同／第2節 テキスト改変の経緯／

第3節 ヒッピアス『抜粋集』からの引用／第4節 パイドロスの
 演説と「引用」／第5節 『饗宴』の語りと書き物

第9章 自死はどの場合に許されるか ————— 165

—— プラトン『パイドン』62A

第1節 『パイドン』の自殺論／第2節 テキスト読解の問題点／

第3節 ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の用法／第4節 伝統的解釈の批判

第3部 プラトン(二)『ポリテイア』

第10章 正義をなす友と敵とは誰か ————— 177

— プラトン『ポリテイア』第1巻334D-E

第1節 写本上の読みの問題／第2節 解釈の問題／第3節 甲解釈の検討／第4節 乙解釈の検討／第5節 与格形の検討／第6節 議論構成／第7節 主格形の採用

第11章 正義を批判する ————— 191

— プラトン『ポリテイア』第2巻357A-362C

第1節 グラウコンの挑戦の文脈／第2節 グラウコンはトラシュマコスの継承者か／第3節 アテナイの現実へ戻る／第4節 アンティフォンの影／第5節 僭主のモデルとしてのギュゲス

第12章 真実の虚偽とは何か ————— 215

— プラトン『ポリテイア』第2巻382A-E

第1節 かき消された虚偽論／第2節 虚偽原理論のテキストとその文脈／第3節 中動態をめぐる検討／第4節 虚偽論の射程

第13章 哲学と政治はどう交わるか ————— 241

— プラトン『ポリテイア』第5巻473C-E

第1節 問題のテキスト／第2節 解釈上の論点／第3節 哲人統治論の提案

第14章 ポリテイアが天上に掲げられている ————— 249

— プラトン『ポリテイア』第9巻592A-B

第1節 奇妙な一節／第2節 議論の検討／第3節 天上のモデル

第4部 プラトン(三)後期の哲学

第15章 万物の構成要素が結び合わされる ————— 267

— プラトン『ソフィスト』の語彙

第1節 結合術としての問答法／第2節 分割による定義／第3節 「ない」をめぐる困難／第4節 先人たちの素朴な比喩／第5節 結合の関係／第6節 認知の関係／第7節 結合としてのロゴス／第8節 結合の総合術

第16章	善をどう論じるか	283
	——プラトン『ピレボス』11A-12B	
	第1節 『ピレボス』の対話の始まり／第2節 対話篇に先立つ対話／第3節 先立つ対話の失敗／第4節 探究の新たな段階／第5節 善き生をめぐるコンテスト／第6節 善き生を作る対話	
第17章	永遠はどのように時間となるか	297
	——プラトン『ティマイオス』37C-38C	
	第1節 プラトン「時間」論の背景／第2節 「時間」の制作／第3節 「時間」の定義／第4節 「時間」の部分と諸相／第5節 時間から永遠を語る	
第18章	プラトンは一人称で書いたか	313
	——伝プラトン著『第七書簡』の真偽問題	
	第1節 書簡をめぐる真偽問題／第2節 アナスとスコフィールドの偽作論／第3節 バーニェットとフレーデの偽作論／第4節 イソクラテスとの関係／第5節 偽作論を退けて	
第5部 アリストテレス		
第19章	問答法は試問術とどう関わるか	333
	——アリストテレス『ソフィスト的論駁について』34.183a37-b8	
	第1節 テキストと議論構造／第2節 ロスの改訂案／第3節 問題箇所への構文／第4節 問題箇所の内容／第5節 ソクラテスとの対比	
第20章	アイデアと名を同じくする	347
	——アリストテレス『形而上学』A6, 987b7-10	
	第1節 アイデア論提示の問題／第2節 テキスト解釈の問題／第3節 文Ⅱの新校訂検討／第4節 文Ⅱの解釈提案／第5節 文Ⅰの解釈提案／第6節 アイデア論の定式	

あとがき	—————	369
出典索引	—————	371
人名索引	—————	387

【凡 例】

1. ギリシア語をカタカナ表記するにあたり、φ (ph) は「ファ、フィ、フ、フェ、フォ」、χ (kh) は「カ、キ…」を用いる。固有名詞に原則として長音は入れない。ただし、一部は慣例に従い、厳密な統一はしていない。
2. 書名は『 』で、論文名や語句の引用は「 」で表記する。
3. 著作や断片からの引用はすべて筆者の翻訳であるが、既訳も参照させてもらった。引用文中で筆者が加える補いは〔 〕で、説明や言い換えは（ ）で示す。
4. 初期哲学の断片への参照は DK 資料集と LM 資料集の番号を並記する。
 DK: Diels, H. & Kranz, W. (1951-1952⁶). *Die Fragmente der Vorsokratiker* I-III, 6. Aufl., Dublin/Zürich: Weidmann; ヘルマン・ディールス & ヴァルター・クラutz 『ソクラテス以前哲学者断片集』全 5 冊 + 別冊、内山勝利編訳、岩波書店、1996-1998.
 LM: Laks, A. & Most, G. W. (2016). *Early Greek Philosophy*, 9 vols., Loeb Classical Library, Cambridge MA: Harvard University Press.
5. プラトン著作への言及は慣例に従い、ステファヌス版 (1578) のページと A-E 区分で、アリストテレス著作への言及は、ベッカー版 (1831) のページ・a/b 区分と行数で行う。
6. 他の略号は以下の通り。
 Cap.: カピッツィ 『プロタゴラス』 (Capizzi, A. (1955). *Protagora: Le Testimonianze e I Frammenti, edizione riveduta e ampliata con uno studio su la vita, le opere, il pensiero e la fortuna*, Firenze: G. C. Sansoni)
 DL: ディオゲネス・ラエルティオス 『哲学者列伝』
 DG: ディールス 『ギリシアの学説誌家』 (Diels, H. (1879). *Doxographi Graeci*, Berlin: G. Reimer)
 FGrH: ヤコービ 『ギリシア歴史家断片集』 (Jacoby, F. (ed.) (1926-). *Die Fragmente der griechischen Historiker*, Berlin: Weidmann, Leiden: Brill)
 IG: 『ギリシア碑文集』 (*Inscriptiones Graecae*, Berlin: W. de Gruyter)
 PCG: カッセル & オースティン 『ギリシア喜劇詩人』 (Kassel, R. & Austin, C. (eds.) (1983-). *Poetae Comici Graeci*, Berlin: De Gruyter)
 PPF: ディールス 『哲学者詩人断片集』 (Diels, H. (1901). *Poetarum philosophorum fragmenta*, Berlin: Weidmann)
 SSR: ジャンナントーニ 『ソクラテスとソクラテス派遣文集』 (Giannantoni, G. (1990). *Socratis et Socraticorum Reliquiae*, 4 vols., Napoli: Bibliopolis)
 LSJ: Liddell, H. G., Scott, R. & Jones, H. S. (1996). *A Greek-English Lexicon*, 9th edition with Revised Supplement, Oxford: Oxford University Press.
7. 異読情報は、▶ の記号で欄外に記し、慣例の写本記号 (アルファベット) を付す。

哲学の言葉を聴く

第1章

西洋古典哲学の理念と方法

第1節 西洋古典哲学

「西洋古典哲学 Western Classical Philosophy」は、西洋古典学と西洋古代哲学史の重なる領域で成立する学問である。古代ギリシアで展開された哲学は、2600年前から現代まで、西洋文明の源流として受け継がれてきた¹⁾。だが、21世紀の現代、その学問を遂行することに、どんな意義があるのか。それは何を明らかにし、何を目指しているのか。

それは、一言で言えば、人間の知的営為、精神世界を全体として浮かび上がらせる試みである。無論、古代ギリシア・ローマは人類の文明の1つに過ぎず、哲学はその一部に留まる。だが、そこに結晶した遺産は比肩するものが稀なほど豊かで、私たち人類の文化に貢献してきた。また、たとえギリシア哲学が特別なものではないにしても、それはより大きな歴史と文明を映し出す鏡として、今日の私たちに多様な視座を提供するかけがえのない意義を担っている。

その一方で、資本主義や帝国主義や植民地主義を通じて西洋文明が世界で主導的位置を占めた歴史において、ギリシア・ローマの古典はそのアイデンティティの源として特権化されてきた。19世紀から顕著になったこの傾向の下で、

1) 「古代ギリシア哲学」の定義と内容は、納富(2021)、「序章1」参照。なお、正確には「ギリシア・ローマ哲学」と呼ぶべきところ、慣例に従い、「ギリシア哲学」の呼称も用いる。

「古代ギリシア・ローマ」像自体もイデオロギーによって歪められ、あたかも純粋な「ヨーロッパ」がそこで始まったかのような幻像が広められた²⁾。そうした偏見を学術的に批判して退けつつ、真実の過去を明らかにすることも西洋古典哲学の役割である。

西洋古典哲学は、従って、単に古代に留まらず、ギリシア・ローマ世界のみを対象とするのではなく、「世界哲学 world philosophy」の視野で重要な役割を果たす。世界哲学とは、人類のあらゆる文明、つまり言語と文化と歴史において、異なる哲学や宗教の伝統を見渡しつつ、それらの間の対話を通じて多元的で普遍的な思考を模索する試みである³⁾。

ヨーロッパ、正確には西ヨーロッパと北アメリカで展開した近現代の哲学である「西洋哲学」は⁴⁾、ギリシア・ローマの古典古代、及びキリスト教中世の哲学に由来するとされる。しかし、古代ギリシアの哲学は、西ローマからラテン中世へと受け継がれたのとは別の経路で、東ローマ・ビザンツから東ヨーロッパやロシアやアルメニアやジョージアへ、また、シリアからアラビアのイスラームへとつながる哲学伝統をも形作った。さらに、ギリシア・ローマの哲学は16世紀以来東アジアにも伝わり、19世紀半ばに開国した日本では「西洋古典」として地位を確立し、すでに日本文化の重要な一部となっている。この点で、ギリシア哲学は、決して西洋哲学が専有する古典とは言えない。このような世界哲学の視野から西洋古典哲学の意義を探ることが肝要である。

西洋古典哲学と並ぶ枢軸の古代文明としては、ウパニシャッドや仏教をはじめとする古代インド哲学、そして諸子百家で知られる古代中国哲学が、それぞ

2) これらの偏見への告発は、1987年刊のマーティン・バナール『黒いアテナ』でなされた。バナール(2007; 2004-2005)参照。ただ、その議論は西洋古典学からは疑問の余地が多く残されている。

3) 世界哲学、及び、そこにおける古代ギリシア哲学の意義については、納富(2024)参照。

4) ここで「西ヨーロッパ」は、主にキリスト教の正教の伝統下にある「東ヨーロッパ」との対比で用いる。地中海圏の南ヨーロッパやスカンジナビアなど北ヨーロッパとの対比ではなく、それらは東西に含める。また、「北アメリカ」は、北米大陸のうち英語・フランス語圏、つまりアメリカ合衆国とカナダを指す。メキシコ以南のラテン語圏も広くは西洋文明にあるが、しばしば除外される。他方で、オーストラリア、ニュージーランドといった英語圏は含まれる傾向にある。

れ固有の思考と伝統を形作ってきた。それらの間では直接の影響関係がないため、類似する思想の間では「比較」という形の考察がとられる。西洋古典哲学が有する特徴と可能性は、それら他者との並置や対決を通じて明らかとなるはずである。そのような比較哲学の研究において極となり、基盤となるのも、西洋古典哲学なのである。

第2節 古典文献学

西洋古典哲学の基盤をなす「古典文献学 classical philology」は、古代ギリシア・ラテンの著作を原典に遡って研究し、現代に甦らせる学術手法である。ヘレニズム期のペルガモンやアレクサンドリアで興った文献学に始まり、ルネサンスの人文学、近現代の文献学（フィロロジ）が学問として確立した。その発展には、とりわけ、16世紀のエラスムスに始まり、18世紀のリチャード・ベントレーや19世紀のカール・ラハマンら、『新約聖書』を校訂した近代文献学者たちの努力があった⁵⁾。

古代ギリシア・ローマで古典ギリシア語やラテン語で書かれた文献は、基本的に中世に羊皮紙・仔牛紙に書写された写本で近代に伝わり、15-16世紀に活版印刷で一挙に普及して今日に受け継がれている。原著者が執筆して最初に流布した本や論文が遠い昔に失われてしまっている以上、それを「読む」試みには大きな人為的な努力が必要となる。この点で、著者が出版した本や自筆原稿まで残っている近現代の文献研究とは、基本的に異なるものである。こうした視点は、私も共同研究に加わっている「編集文献学 Editionswissenschaft, textual scholarship」が解明している⁶⁾。

では、古代ギリシア・ローマの哲学を対象とする古典文献学とはどのようなものか⁷⁾。プラトンやアリストテレスのように、中世に書写された「写本 manuscript」によって伝承されたテキストが多数現存する場合でも、個々の文言や

5) 古典文献学の歴史については、レイノルズ&ウィルソン (1996)、Timpanaro (2005) 参照。

6) 「編集文献学」は、明星・納富 (2015) 参照。

7) 方法論は、納富 (2021)、「第1部 序章2：ギリシア哲学資料論」参照。

文章の読みには多くの違いがある。それらの「異読 *varia lectio*」を丹念に調べて比較検討しながら「批判的校訂資料 *criticus apparatus*」を作成する作業が基礎となる。そこから、原著者が書いたと推定される原著、あるいはそれにできるだけ近い「祖本 *archetype*」の原テキストを復元する校訂作業が、古典文献学の中心課題である。だが、そこには、唯一の（神聖な）原典があり——典型的には「神の言葉」である「聖書」——それが忠実に書写されてきたという前提があり、現代では疑問や批判も向けられている。編集文献学はその点を含めて、古代の文献を扱う方法論の検討を進めている。

従って、プラトンやアリストテレスを読むということは、定番の「校訂版 *edition*」を言語的に読解する作業ではない。むしろ、校訂版に印刷されているテキストを批判的に検討し、あるいは、複数の校訂版を照らし合わせて、その都度原文を復元しながら翻訳することである。どれほど信頼できる校訂版であっても、それをそのまま用いるのでは研究として不十分であり、まして、翻訳のみに頼るのでは、それがどれほど定評あるものであっても、専門研究としては成立しない。他方で、古典が多くの言語への翻訳を通じて受け継がれてきた以上、その受容の重みを決して無視してはならない。ギリシア・ローマの哲学をどう日本語に訳すか、その長い苦闘の歴史は、近代日本で哲学の言葉を成立させる役割を担ったと考えられる。

プラトンやアリストテレスのようにビザンツなどで書かれた写本が多数残っている場合とは異なり、初期ギリシアの哲学者たちやヘレニズム哲学諸派、さらに古典期哲学でもソフィスト思潮やソクラテス派や学園アカデメイアの哲学者たちの著作は古代から中世に失われて、同時代や後世の引用や報告からのみ知られる状況にある。そのため、いわゆる「断片 *fragmenta*」や「証言 *testimonia*」を集成した「断片集」——初期ギリシア哲学の DK や LM——の扱いには、文献学的な訓練が必要となる。つまり、その言葉が元来どのような著作や状況で語られたものか、どの程度信頼できるものなのか、文脈や失われた背景は何だったのかを見てとることが必要となるのである。

西洋古典哲学の研究において古典文献学の手法が必要となる場面は3つある。第一は、中世写本の読解によりプラトンやアリストテレスらの著作を復元して読み解く作業で、これは古典文献学の中心課題である。第二に、エジプトの砂

漠やイタリアのヘルクラネウム遺跡などから出土した「パピュロス断片」資料の解明があり、正確には文献学よりもパピュロス学の仕事である。第三に、古代の著作に含まれる引用や証言の伝承を取り扱う「学説誌 doxography」の研究があり、この基盤の上に各種の断片集が編まれている。

東京大学で明治期に哲学と西洋古典学を教えたラファエル・フォン・ケーベル (1848-1923) は、晩年にこう語っていたという。「Philosophie (哲学) は非常に多くのことを約束しているが、自分は結局そこからあまり得るところはなかった。Philologie (文学) は何も約束してはいないが、今となってみれば自分は実に多くのものをそこから学ぶことができた」⁸⁾。哲学と文献学は手を携えて、ギリシア・ローマの哲学を私たちに開示してくれる。

第3節 古代哲学史

西洋の「古代哲学 Ancient Philosophy」は、紀元前6世紀初めから紀元後6世紀前半まで、地中海東部から西ヨーロッパの地域で、つまり、ギリシアのポリス世界からヘレニズム世界を経てローマ帝国まで、古典ギリシア語及びラテン語で営まれた、キリスト教以外の哲学である⁹⁾。そこで展開された豊かな思索を最大限に活かし、現代の哲学の参考にすることが大切であるが、その意義は常に反省されるべきものである。

まず、哲学という思考の営みに「哲学史 history of philosophy」がどう関わるのかは、決して自明ではない。現在大学で学ばれ研究されている「哲学」という学問で、「哲学史」は必須、ないしは中核となっている。だが、ヨーロッパの歴史で「哲学史」が哲学の一部門となったのは18世紀からのことで、それ以前に哲学の遂行とは体系的な理論や討論であった。過去の哲学者を並べてそこに多様性や展開を見る「哲学史」という手法は、少なくとも前4世紀のプラトンに遡るが、哲学者とその思想を系譜的に辿ることでプラトン自身の哲学を

8) 和辻哲郎の回想による証言。和辻 (1962), 43 参照。

9) 納富 (2021), 「序章1 ギリシア哲学とは何か：第1節 ギリシア哲学史の哲学的意義」参照。

基礎づけ展開させたのは、弟子アリストテレスであった¹⁰⁾。

アリストテレスの発想になる学問ごとの「エンドクサ、学説」の整理と精査は、同僚で学園リュケイオンを引き継いだテオフラストスが「学説誌」という方法として確立し、ヘレニズム期からローマ期まで受け継がれた。後1-2世紀にアエティオスがまとめた『学説誌 Placita』は主題別の学説整理であったが、それと並んで、学派の系譜を辿る「学統史」もあり、後3世紀頃にまとめられたディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』はその両方の要素を取り入れている。彼の哲学史は、アナクシマンドロスに始まる「イオニア派」とピュタゴラスに始まる「イタリア派」の2つの系列で哲学者と学派を整理して叙述していく。

近代ヨーロッパでは15世紀初めにディオゲネス・ラエルティオスのその著作がラテン語に翻訳され読まれるようになると、それに則った哲学史記述が与えられるようになる。だが、哲学史が古代ギリシアを超えて近代ヨーロッパまで射程に入れ、それが哲学の営みに位置づけられたのは18世紀のことである¹¹⁾。以後、19世紀前半のヘーゲルに代表される哲学では、哲学史こそが人類の精神と知性の展開を示す学問として重視された。

哲学史が重視されるにつれ、「哲学」の起源が古代ギリシアにあると考え、それに先立つエジプトやメソポタミアの先進文明との連続性を断ち切る「西洋中心主義」の傾向が次第に強まった。マーティン・バナールは、「白人」たる古代ギリシア人が作った文明という人種差別的な「アリア・モデル」の歴史観が、18世紀末からドイツ文献学で広まったと指摘する。「古代ギリシア」像に基づくそうした西洋文明のアイデンティティと特権性が、「哲学」の理念において確保され、その基盤に「哲学史」が置かれたのである。現代では当然と思われている哲学史教育、つまり、哲学を学び研究する基礎に西洋哲学史があ

10) プラトン『ソフィスト』242C-243A にその原型があるとも言われるが、典型的にはアリストテレス『形而上学』A (アルファ) 巻が「哲学史」と呼ばれる。

11) この経緯は、ドイツ・ヒルデスハイム大学でロルフ・エルバーフェルト Rolf Elberfeld 教授を中心に推進された「コゼレック・プロジェクト Koselleck-Project-Histories of Philosophy in a Global Perspective」の一連の研究成果が明らかにしている。有益な資料集成であるウェブサイトを参照：<https://www.uni-hildesheim.de/en/histories-of-philosophy/>

るという方針は、近代ヨーロッパで西洋中心主義と連動しつつ発展してきた特殊な思考法であった。

しかし、そのようなイデオロギー的な歴史背景が明らかにされている今、それゆえに哲学史を学ぶことが不要であるということにはならない。また、西洋哲学史、とりわけ西洋古代哲学史を学ぶことが西洋中心主義のイデオロギーに加担することになるという危惧も、過剰である。現在私たちが従事している「哲学」が、西洋哲学をはじめとする多様な哲学遺産の上に成り立っている以上、それらへの批判的検討が必須だからである。私たちが用いている数多くの哲学概念は古代ギリシアに遡り、前1世紀のキケロ以来のラテン語訳を通じて中世から近現代の哲学に流れ込んでいる。さらに、哲学が取り上げる問題関心や枠組み自体もそのような哲学の歴史の上に成り立っており、歴史から切り離して純粋な思弁や思考を取り出すことはできない。それは、倫理や政治や法律や宗教といった文化と時代に制約されがちな領域に限らず、自然や論理といった、一見絶対的に見える思考法においても同様である¹²⁾。

西洋哲学の根源にあると位置づけられる古代ギリシアの哲学を哲学的に再検討することは、今日の私たちが取り組む哲学の可能性を吟味し、拡張することである。古代という遠い過去に目を向けることは、現在の私たちが依拠し自明視している見方や理念が、それほど確固としたものではないこと、それとは別な見方が存在すること、さらに、もしかしたらそれら過去のものの考え方がより適切であるかもしれないことを教えてくれる。私たちはそこから自己を見直し、新たな世界像へと向かうことができる。古代ギリシア哲学は、現代への鏡なのである。

古代ギリシア・ローマの文献は、近現代の視点からアナクロニズムな仕方で読まれることもしばしばある。そういった独断的誤謬の陥穽を避けながら、哲学著作が書かれた時代の状況に即して思考を復元するためには、歴史学の視点が必須である。失われた多くの部分、とりわけ議論の文脈や場を見てとるには、広く歴史や文学などの文献資料、及び、考古学や美術史など非文字資料の活用が必要となる。「哲学史」の方法には、哲学そのものに加えて、古典文献学と

12) ギリシア哲学史の現代での意義は、納富 (2021), 22-31、及び、(2022), 第1章参照。

歴史学との協働が必要なのである。

第4節 研究の射程

西洋古典哲学は「古典 classics」を扱う。だが、それは「秀逸な精神的偉業」という元来の意味に留まらない。現在行われる西洋古典の研究は、古代文化のあらゆる側面を扱い、それを総合的に見ようとする試みである¹³⁾。ここでも世界哲学の視座が大切である。

世界哲学は、人類が過去から現在まで地球上の様々な地域と時代に展開してきた多様な哲学的営為を掘り起こしながら、それらの間で新たな方向を目指す。だが、多数の文化や言語や民族や宗教で展開されたあまたの哲学を取り上げ、それらをすべて平等に扱うことは事実上不可能であり、また、必ずしも生産的であるとは言えない。多様な諸哲学を見据えて位置づけるためには、いくつかの中核的な哲学伝統を取り上げ、それを基幹としてそれとの関係や比較を行う考察が有効であろう¹⁴⁾。その意味で、古代ギリシア・ローマから中世キリスト教カトリックを経てルネサンスから近現代へとつながる「西洋哲学」は、明らかに1つの柱に据えるべきものである。もう1つの柱には、やはり古代から中国語の「漢字」を用いることで文化と伝統を共有してきた文化圏、具体的には、中国、朝鮮、日本、ベトナムなどの「東アジア哲学」があると考えられる¹⁵⁾。

古代ギリシア哲学と古代中国哲学との比較検討は、ケンブリッジ大学のジェフリー・ロイドらによって進められてきたが¹⁶⁾、2つの古代哲学間の比較哲学は、さらに他の伝統へと対象を拡張することが期待される。両者の間に直接の交流や影響関係はないが、にもかかわらず、多くの類似性や興味深い共通性が見出される。その考察は、人類の知的営為を解明するのに大きなヒントを与えてくれるはずである。

他方で、「西洋古代哲学」として後代から一まとまりで捉えられる古代ギリ

13) 「古典」の意味は、久保(1988/2018)、「序論」参照。

14) 「比較哲学」は中村(1960)、三枝(1969)参照。

15) 納富(2024)、第7章(東アジア哲学)、第9章(古代ギリシア哲学)参照。

16) Lloyd(1990)、ロイド(2009)等。

シア・ローマの哲学者たちの中にも数々の大きな相違や対立があり、決して一枚岩ではなかった。プラトンやアリストテレスら後世に絶大な影響を与えた者だけでなく、その背景にいて批判される側だった哲学者たちの思索や著作を見据えることも重要である。とりわけ、ソフィストと弁論術の伝統がそれにあたる¹⁷⁾。古代哲学を一部の突出した天才の偉業としてではなく、総合的な視野で活性化させて見ることで、西洋古典哲学が多元的な普遍性の追究のモデルとなることが期待される。

19世紀に作られた「哲学」という日本語は、古典ギリシア語「フィロソフィア—φιλοσοφία」に由来する「フィロソフィー philosophy, Philosophic, filosofia」という欧語の翻訳である。この言葉は今も哲学的思考の起源として学問のあり方を或る程度制約しているが、それを見つめ直すことは、新たに開かれた哲学を打ち出すために必須の作業である。西洋古典哲学を徹底的に進めることで、哲学そのものの可能性を探りたい。まずは、伝えられたテキストを丁寧に読み解いていく。耳を澄ませて、哲学の言葉を聴いていきたい。

【参考文献】

- バナール、M. (2004-2005). 『黒いアテナ——古典文明のアフロ・アジア的ルーツ II』 上下巻、金井和子訳、藤原書店。
- バナール、マーティン (2007). 『ブラック・アテナ——古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ I 古代ギリシアの捏造 1785-1985』、片岡幸彦監訳、新評論。
- 久保正彰 (1988/2018). 『西洋古典学——叙事詩から演劇詩へ』、放送大学教育振興会；『西洋古典学入門——叙事詩から演劇詩へ』、ちくま学芸文庫。
- Lloyd, G. E. R. (1990). *Demystifying Mentalities*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ロイド、G. E. R. (2009). 『古代の世界 現代の省察——ギリシアおよび中国の科学・文化への哲学的視座』、川田殖・金山弥平・金山万里子・和泉ちえ訳、岩波書店。
- 明星聖子・納富信留編 (2015). 『テキストとは何か——編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会。
- 中村元 (1960). 『比較思想論』、岩波書店。
- 納富信留 (2006/2015). 『ソフィストとは誰か?』、人文書院；新版、ちくま学芸文庫。
- 納富信留 (2021). 『ギリシア哲学史』、筑摩書房。
- 納富信留 (2022). 『西洋哲学の根源』、放送大学教育振興会。
- 納富信留 (2024). 『世界哲学のすすめ』、ちくま新書。

17) 納富 (2006/2015) 参照。

- レイノルズ, L. D. & ウィルソン, N. G. (1996). 『古典の継承者たち——ギリシア・ラテン語テキストの伝承にみる文化史』、西村賀子・吉武純夫訳、国文社（原著 1991 年刊第 3 版）。
- 三枝充憲 (1969). 『東洋思想と西洋思想——比較思想序論』、春秋社。
- Timpanaro, S. (2005). *The Genesis of Lachmann's Method*, edited and translated by G. W. Most, Chicago: University of Chicago Press.
- 和辻哲郎 (1962). 「ホメーロス批判」、『和辻哲郎全集 第六巻』、岩波書店。

第 I 部

初期ギリシア哲学・ソフィスト思潮

第 2 章

視点を超えて語る

クセノファネス断片 34 DK

第 1 節 クセノファネスの認識論断片

ギリシア哲学を読むことは、「哲学（フィロソフィア）」の起源を再考することである。本章で私は、私たち人間にとって「知る」とは何かを探究し、哲学の基礎をなす「認識論 epistemology」の起源を問い尋ねる。そのために、コロフォン出身のクセノファネス（Xenophanēs, 前 570 頃-前 470 頃）を取り上げ、彼の思索を考える上で最も重要と目される断片 34（以下 Diels-Kranz (1951⁶) の B 番号で言及する）を検討する。

断片 34 は、以下の通りである。

[クセノファネス断片 DK 21 B34 = LM XEN. D49]

καὶ τὸ μὲν οὖν σαφὲς οὐτίς ἀνὴρ ἴδεν^{†a} οὐδέ τις ἕσται
εἰδὼς ἀμφὶ θεῶν τε καὶ ἄσσα λέγω περὶ πάντων·
εἰ γὰρ καὶ τὰ μάλιστα τύχοι τετελεσμένον εἰπών,

▶ a [異読情報]

ἴδεν セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第 7 卷 49, 110, 第 8 卷 326; DK (1951⁶), Leshner (1992)

γένετ' プルタルコス『どのようにして若者は詩を学ぶべきか』2.17E-F, Diels (1903¹), LM (2016)

οἶδεν ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第 9 卷 72 (BF)

εἶδεν ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第 9 卷 72 (P)

αὐτὸς ὅμως οὐκ οἶδε· δόκος δ' ἐπὶ πᾶσι τέτυκται.

そして、正確なことは誰も見た人はなく、誰一人知る者もないだろう、神々についても、すべてのことについて私が語ることにしても。

というのも、もし最大限、実際のことを言い当てたとしても、その者自身で知らないのだから。そうではなく、思いがすべてを覆っている。

この有名な断片は4行の六脚韻（ヘクサメトロス）からなり、3人の著者の計5箇所引用され伝わっている。セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第7巻49, 110, 第8巻326の3箇所4行分を引用しており、プルタルコス『どのようにして若者は詩を学ぶべきか』2.17E-Fが第1-2行を、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第9巻72が第1行と第2行 εἰδῶςまでを引用している。それらの引用の前後には、文脈を特定する情報は含まれていない。詩の冒頭にあったと解する研究者もいるが、「そして καὶ」という始まり方を考えると、一連の詩句の一部とするのが妥当である。

また、ガレノスに第3-4行のパラフレイズがある。

[ガレノス『脈の違いについて 第3巻』636-637 Kühn, vol. 8]

κατὰ δὲ τὸν φιλόσοφον τὸν εἰπόντα· ἦν γὰρ καὶ τὰ μέγιστα τύχη τετελεσμένα, εἰπὼν αὐτὸς, ὅμως οὐκ οἶδε, δοκὸς δ' ἐπὶ πᾶσι τέτυκται. διὰ τὸν δοκὸν τοῦτον εὐλόγον διαφέρεσθαι.

これを語った哲学者によれば。即ち、もし最大限に成就して、その人が言っても、知らないのだ。そうではなく、思いがすべてを覆っている。

この思いゆえに、理にかなうものは優れている。

断片34第1行の8語目には4つの異読がある。まず、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』の写本にある2つの読み οἶδενと εἶδενは韻律に合わないため排除される。残る2つのうち、プルタルコスの読み γένετ'では「～を知る人は一人もいなかったし〔今後も〕いないだろう」の意味になる。2つの主動詞は過去と未来で揃うため、バランスがとれていて分かりやすい。1860

年刊のミュラッハの断片集、1903年刊のディールスの断片集ではこの読みがとられていて主流をなしていたが¹⁾、その後、ヘルマン・フレンケルとブルーノ・スネルがその読みを退けてセクストス・エンペイリコスが報告する ἴδεν の読みを採用したことから²⁾、ヴァルター・クランツが補訂した1934年以降のDK断片集など³⁾、今日ではこちらの支持者が多い。ただし、ラクス&モストら⁴⁾、現在でもプルタルコス of the reading をとる解釈者もいる。

フレンケルは、γένητ' を読む構文では第1行前半の τὸ σαφές を目的語にとる分詞 εἰδὼς からかなり離れていることになり、アルカイック期の構文としては不自然だと論じ、それゆえプルタルコスが記憶から不正確に引用しているとする⁵⁾。他方で、セクストス・エンペイリコスが報告する ἴδεν は、アオリスト εἶδε(v) の叙事詩形で「見た」を意味するが、「見る」と「知る」がほぼ重なって用いられることは、例えばホメロス『イリアス』第2巻485-486行「軍船カタログ」に見られ、ブルーノ・スネルはクセノファネスのこの断片が『イリアス』のその箇所でのムーサの女神たちへの呼びかけに関わる発言であると解している⁶⁾。その場合、485行「あなた方は知っていて ἴστε」、486行「私たちは知らない／見ていない ἴδομεν」に語句のレヴェルで対応していることになる。「より困難な読み *lectio difficilior*」でもあるセクストスの読みが優れている。

この有名な断片をめぐるには多様な解釈があるが、ここではクセノファネスの言葉を古代ギリシア精神史の文脈に置くことに努めたい。クセノファネスがいかにかに語ったかを考察することにより、彼の「認識論」の試みが一体何であったかを論じていく。

1) Mullach (1860), 103 (fr. 14), Diels (1903¹), 56.

2) Snell (1924), 25, Fränkel (1974), 122-123.

3) Diels & Kranz (1951⁶).

4) Laks & Most (2016), III, 54 (XEN. D49).

5) Fränkel (1974), 122-123.

6) スネル (1974), 254, 257-258, 261.